



お茶を飲みながら、
ぎのわんの歴史を
のぞいてみませんか？

川のある風景

今回は地上の道ではなく海上の道についてご紹介いたします。道といっても船着き場なので、地上で例えると空港または、バスロータリーの様なものでしょうか。

上の写真は、1984(昭和59)年頃の宜野湾の西南端、浦添市との境をなす牧港川・比屋良川の川口に南面する宇地泊の船着き場です。その川口は大きく湾入して良好な入江となっており、波静かで船を停泊するには格好の場所でした。



▲ 宇地泊の船着き場 1984(昭和59)年撮影



▲ 現在の宇地泊の元船着き場 2018(平成30)年撮影

その入江から比屋良川へ上ると、そこには広大な袋状の凹地がひろがり、港田原(シナトウダーバル(小字名))と呼ばれていました。かつてその一帯には中国船や日本船が碇泊し、交易が盛んに行われていたという伝承が残されています。その名残りでしょうか、日本船が取水した湧水をヤマトウガイグワ、唐船が往来した凹地をトウーシングムイなどと呼んでいます。

大正時代末には、中頭郡唯一の鯉漁船と鯉節製造場が設立され、船主は当初は糸満漁民があたり、後に宇地泊の漁民が受け継ぎ、主に慶良間近海で操業しました。

下の写真は現在の宇地泊の船着き場です。川に沿って道路が建設され、さらに橋がかかり、風景は様変わりしました。川岸の形だけが、かすかに昔の面影をとどめています。

【問合せ】
市立博物館 ☎ 870-9317



はじめに

今回は、市内の集落の中でも比較的新しい時期にできた真栄原や佐真下の文化財をいくつか紹介したいと思います。
真栄原・佐真下の誕生

市内には、約四五〇年頃前にはすでに存在していた集落がありますが、真栄原や佐真下は一九三九年以降に周辺の集落から分離・独立してできた集落です。このように比較的新しい集落は、琉球王国時代の士族層が各地に移り住んだことでつくられた屋取集落であり、真栄原は宜野湾・我如古・嘉数の各集落の一部が分離・統合してできた集落です。その後、一九四三年には真栄原の北東側が分離・独立をしたことによつて佐真下集落が誕生しました。
集落に残された文化財

それでは、真栄原や佐真下に残されていた文化財を見てみましょう。この地域には、かつてナガサクガマ、タメーシ(玉壺)ガマ、チシ(喜瀬)ヌメーヌガマなど複数の洞穴が見られました。が、都市化が進むうちに次第に埋められてしまった洞穴も多く、今ではめったに目にするがありません。洞穴のほかに真栄原のウブガーや佐真下のウブガー(ヌメーヌカー)などもあり、集落の水源や行事などに利用され、今でも

拝みの対象になっています。また、さらに古い文化財としては、数百年前のグスク時代に使われていたかも知れない土器や中国産青磁(磁器)の破片などが真栄原アガリイサガマ洞穴遺跡で発見されています。そして、佐真下西原遺跡でも数百年前のものと思われる地層が残っていたことが分かっており、当時の田畑に関連する地層ではないかと考えられています。

このように文化財を調べることで、集落ができる前にそれぞれの時代の人々が何らかの活動をしていたことが分かります。
おわりに

今回紹介した文化財の様子はほぼ把握されているのですが、もしかすると市内にはまだ発見されていない文化財が人知れず残っている可能性もあります。開発工事などを予定される際には、その場所に遺跡やその他の文化財が残っていないかの確認をさせてもらっていますので、ぜひ文化課までお問い合わせください。

【問合せ】文化課 ☎ 893-4430



真栄原のウブガー



佐真下のウブガー